

氏 名 石川 了

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 196 号

学位授与の日付 平成 22 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 江戸狂歌壇史の研究

論文審査委員	主 査	教授	大高 洋司
		教授	鈴木 淳
		教授	山下 則子
			長友 千代治
			(愛知県立大学 教授(元職))
	教授	稲田 篤信(首都大学東京)	

論文内容の要旨

序章では、単に従来の諸説を再構築するのではなく、第一章以下の筆者の観点を盛り込みつつ、筆者なりの江戸狂歌通史をその爛熟期である天明期末までに絞って、「黎明期」「胎動期」「大流行」「天明期の展開」の四期に分けて概説し、以て本論への導入部とした。

【第一章】その爛熟期である天明狂歌壇における諸問題を論じた。

①江戸狂歌をはじめて出版した浜辺黒人の出版活動、具体的には『栗能下風』・『初笑不琢玉』・『狂歌猿の腰かけ』についての出版経緯と分析。

②天明三年の江戸狂歌大流行前夜ともいふべき「向島三囲稻荷狂歌会」（天明二年四月開催）には、通説にいわれるような唐衣橘洲色はなく、四方赤良中心とする四方側の催しだった。

③天明三年正月の赤良編『万載狂歌集』と橘洲編『狂歌若葉集』によって江戸狂歌は爆発的流行を見る。その前者における優位性に対し、後者に対する強い批判は、従来からの赤良重視の研究に基づく偏った見方の結果であって、橘洲側からの視点に大きく欠けている。

④天明三年刊の『狂歌師細見』は『吉原細見』のパロディであるだけに、遊女に見立てられた狂歌作者が特定しがたく、これが好資料なのに十分には活用されてこなかった最大の要因である。そこで、天明期狂歌資料の網羅的調査を試み、その上で擬せられた狂歌作者の比定を試みた。

⑤天明期における狂歌連は、大きく地域連と個人連に二分されることを論じた上で、天明三年段階では橘洲に「四谷連」という地域連はあっても個人連は存在しておらず、同五年秋になって初めて「唐衣連」または「橘洲連」なる個人連が成立する。

⑥そもそも「天明狂歌」なる呼称は誰がいつ頃から唱えはじめていかなる経緯を経て現在の文学史用語となったのかを検証した。この語の初出は、管見の限りでは昇月堂編『狂歌かつらの花』における弘化四年六月付の月下園桂影住跋文中である。その前後から戦前までは「天明調」・「天明風」・「天明振り」との呼称が主流で、戦後になって研究者では浜田義一郎、作家では石川淳が「天明狂歌」と称したことを機に文学史用語としての定着を見る。

【第二章】天明期以降をも視野に入れて狂歌作者に焦点を当てた。

①天明狂歌壇の盟主四方赤良と山道高彦・吉野葛子夫妻における親交を跡づけた。また高彦夫妻は初め元木網門下として天明狂歌壇に参入したこと、妻葛子の狂名命名者は木網妻の知恵内侍で、早く天明年中に没して高彦に後妻がいること、高彦の死に際してはなぜか赤良が口を閉ざしていること等にも言及した。

②赤良が長崎出役中に長崎から江戸の高彦宛に送った資料を主とする『蜀山人自筆文書』（大妻女子大学所蔵）を紹介・分析し、留守中の大田南畝狂歌会は高彦に委ねられていたこと等にも言及した。

③大妻女子大学所蔵の高彦と竹垣柳塘宛の赤良書簡計十通の紹介と分析を行い、親しい狂歌仲間としての高彦と、親子ほども年下である忘年の知友・柳塘との日常的な交流を具体

的に論じる。

④狂歌三大人の一人で赤良朋友の朱楽菅江について、略伝と家系、安永期までの文学活動、天明期における活発な狂歌活動、赤良が狂歌・戯作界と絶縁した寛政期以降菅江没までを、それぞれ具体的に論じ、特に狂歌活動についてはその入集刊本を知りうる限り列挙した。

⑤寛政・享和期の洒落本作者である小金厚丸と旭間婆行については異名同人説があるが、別途、狂歌資料から再検討してみると、明確に両者別人であることが判明する。

⑥天明期から明治期まで五代続いた浅草庵の代々について論じた。特に二世守舎では前号「守家」での狂歌活動等について、また三世春村では国学者として著名だっただけに従来等閑視されてきたその狂歌活動の全貌を、さらに四世広道では、これまた戯作者としての文筆以外にほとんど報告のないその狂歌活動について、郷里の熱田時代から説き起こした。

⑦上方の一大名跡「八文字屋（舎）」を江戸で継承した幕末の狂歌作者・村田元成論。元成は天明狂歌作者の加保茶元成の孫に当たり、三世浅草庵春村の門人にして四世浅草庵広道とは親友だった。その狂歌活動を中心とする全体像を論じる。

【第三章】江戸狂歌そのものではなく、それに付随する諸問題を論じた。

①江戸市民文芸だった江戸狂歌の地方、特に天明期の尾張への伝播について論じる。その方法として、天明狂歌本に見える国付作者に注目した。天明期の初期狂歌本には国付がない作者であっても、後の天明期狂歌本では新たに国付が付記されるようになる。この国付を基に先行狂歌本に当たり直すと、埋もれている地方狂歌作者が見いだせる。尾張を中心に論じたのは、同国が当初から江戸狂歌に敏感だったからに他ならない。

②「入花」制度とは当初、投吟者に出版費用のみを分担してもらった制度だったが、後には撰者による撰歌料を上乗せしたものを指すようになる。天明期から始まるこの制度を軸として、江戸狂歌文化の一端を通史的に論じたものが本稿で、伝存することが希な投吟用募集チラシを基礎資料として、文政期の実態を考える。

③散文である読本の撰取を企てた狂歌本に、文政期の『詠詠寄譚』がある。その三人の撰者と画工は、この時の反省を踏まえつつ、天保期にかけてさらに同様な取り組みとして『歌の友ふね』『栄花の夢』なる狂歌本を刊行している。その経緯等について具体的に論じる。

【第四章】当初から関心が高かった尾張における江戸狂歌文化を基軸として、尾張戯作界の再検討を試みる。

①寛政期から文政期にかけての尾張洒落本界に江戸狂歌趣味があることを、その洒落本界の動向および特筆すべき作者の狂歌活動を通して分析検討した。

②化政期の名古屋書肆・万巻堂菱屋久八は後の本居内遠その人であるが、本居家に入る以前は盛んに狂歌・戯作活動を行っている。その実態を具体的に論じる。

③その久八の代表作が文化期の『狂譚弄花集』で、尾張関係者のみの集大成である。同書には、江戸狂歌の発生と展開に関する寛政九年付の唐衣橘洲の一文があって著名だが、同書自体の調査研究はされていない。同書は当初、無刊記の久八私家版、次いで万巻堂商品として発刊された。その経緯と同書の意義について具体的に論じる。

④主として文政から天保にかけて活動した花山亭笑馬（尾張藩御蔵方手代）の伝記とその

狂歌・戯作活動、および合作者・二酔亭佳雪について具体的に論じ、笑馬の作かと思われてきた天明四年の洒落本『角鶏卵』が笑馬の著ではないこと等についても言及する。

⑤尾張における幕末の雑学者として著名な小寺玉晁も狂歌活動を行っており、刊本に入集するのみならず、高級尾張藩士の山月楼扇水麿とも狂歌を通じて親交があったことを論じる。

⑥幕末の尾張には、江戸の耽奇会にも似た耽古会なる組織があった。その成果である『乞児奇伝』と『骨董評判記』を通して、狂歌趣味の会員もいたその面々、および同会性格の一端を論じる。

⑦歌書収集家として著名な雑賀重良氏旧蔵書（名古屋市蓬左文庫蔵）の内から、尾張と美濃の狂歌資料を紹介する。

石川了氏の論文「江戸狂歌壇史の研究」は、序章及び第一～四章から成る。本論文の題名「江戸狂歌壇」には、地域としての「江戸」ばかりではなく、地方における「江戸狂歌」の受容、及び地方から江戸へのフィードバックという意味内容も含まれており、「江戸」に対する「地方」の、いわば代表として、「尾張」が置かれている。当時江戸・京都・大阪に継ぐ都市として栄えていた名古屋を中心に、尾張における「江戸狂歌」の浸透がどのようなものであったかの詳細な検討は、本論文の大きな特徴をなすものである。

序章「江戸狂歌の流行－天明末までを中心に－」では、近世日本の中後期（18～19世紀前半）という時代に即した文芸として評価される「天明狂歌」について、第一章以下に述べられた独自の観点を導入しつつ、通史的に概観している。

第一章「天明狂歌をめぐる諸相」では、『狂歌若葉集』・『万載狂歌集』など主要作品を中心に、現在までの研究史を視野に入れながら浜田義一郎氏をはじめとする主要な従來說を再検討し、きわめて実証的に修正している。特に、「天明狂歌」の発生期にあって、人氣の高い四方赤良（大田南畝）に対し、貶められることの多かった唐衣橘洲（田安德川家家臣小島源之助）の位置付けについての、文献に即した肯定的な論証（従來說における橘洲批判は、赤良重視の研究態度に基づく偏見の結果とする）は、説得力に富む。また石川氏は、狂歌師を、個々の作者レベルばかりでなく、その所属する「連」という単位で捉えることにつとめており、ことに、「天明狂歌」の名鑑として知られる『狂歌知足振』・『狂歌師細見』を併用して、狂名と所属「連」とを一覧できるようにした第四節『狂歌師細見』の狂歌作者比定は、専門研究者に多大の便宜を与える労作で、本一覧に基づく考証の深化がさらに期待される。

第二章「江戸狂歌作者点描」では、「天明狂歌」の代表作者四方赤良と山道高彦の交流、及び朱楽菅江の事蹟について、書簡等、未紹介資料の翻刻と注釈を通じて、個別の狂歌作者の伝記に光をあて、また従来伝記的事実を掘り下げて、確実な研究基盤を提供している。後半では、天明から幕末まで、四代に及ぶ狂歌結社「浅草庵」の長の詳細な伝に及ぶ。ここには、零細な資料に到るまで博搜を極め、資料それ自体に語らせるという石川氏の研究姿勢が良く反映している。四世浅草庵高橋広道こと笠亭仙果の伝は、江戸狂歌と名古屋戯作の関係の考究にも接続するものである。

第三章「江戸狂歌の周辺」では、江戸狂歌に付随する諸問題（地方伝播・入花制度・狂歌本の読本〈近世後期の長編小説〉化）を取り上げている。チラシ等に記された投句料（入花）の検討に基づいて、「連」の多様化・全国化を追跡する（第二節）など、狂歌の作者・読者の接点となる「場」の把握という、新しい視点を提示している。また、「天明狂歌」に続く寛政期以降（文化・文政・天保・幕末期）の狂歌本の博搜を通じて、江戸狂歌壇と尾張狂歌壇とのつながりを重要と位置付けている。このことは、ひるがえって、江戸市ヶ谷尾張藩屋敷勤番の武士作者が「天明狂歌」に果たした役割の大きさという申請者独自の見解（第一節）に、十分な説得力を加えている。

第四章では、江戸狂歌の受容が盛んに行われた尾張狂歌壇の実態を、従来言及の少なかった作者・関係者に即して解明している。「江戸狂歌文化」を基軸に、名古屋において狂歌集の出版に功績のあった菱屋久八（後の本居内遠）の活動を追い、さらに同地の戯作全般

を考察対象として、従来研究の少なかった尾張戯作者の活動（花山亭笑馬・小寺玉晁など）を広く紹介するなど、この地域において狂歌壇の占める位置の大きさについて、新たな知見を提示している。

本論文には、「狂歌壇」に関する記述の具体性に反比例して、狂歌の文学性に触れるような発言は必ずしも多くなく、全体として論述の歯切れの良さにはやや欠けるという難点も見受けられる。しかしこれは、上述のような資料に密着した研究姿勢から、必然的に導き出された結果であり、本論文に示された成果の堅実さを保証するものでもある。本論文は、狂歌論のみならず、近世中後期俗文芸研究、延いては地方における都市文化の伝播と享受、その担い手となる社会階層の問題等、今後取り組むべき日本近世文学・文化研究の様々な課題への示唆を多く含んだ基礎的業績として、高い学術的価値を有している。

以上、審査委員5名は全員一致して、本論文が博士の学位に相応しいものと判断する。